

次の文章は、小林道憲『芸術学事始め』の一節である（設問の都合で一部省略し、表記を改めたところがある）。読んで設問に答えよ。

画家にしても、彫刻家にしても、芸術家は、対象をよく見て、自分の感性でそれを構成し、作品を作っていく。しかし、必ずしも、自分の構想通りに作品を作り上げられるわけではない。

陶芸は、その最も適切な例であろう。もともと、陶芸家は、単に自分だけの構想力と力量だけで作品を作ろうとは思っていない。どのような作品が出来上がるかは、かなりの程度、素材や条件に支配される部分が多い。粘土の組成や性質、火の温度の加減、湿度など、その時、その場の気候、風土など、自然に任せねばならない部分が多いのである。陶芸は、ある意味で、大自然の創造力に身を任せる芸術である。素晴らしい陶芸作品は、土の声を聞き、火に従い、自然に随順になったとき生み出される。陶芸は、地水火風、天地人すべてが協働して創造されてくる芸術なのである。その意味では、陶芸の場合、人為では制御しきれない面、偶然に任せねばならない面がある。どのような味わい深い色が出てくるかは、炎や窯の偶然を当てにしなければならぬのである。むしろ、そういう偶然の効果や成果を喜ぶのが陶芸でもあ

る。^A 陶芸は、自然の中にみずからの行為を参入させて、自然の方から作品を作り出す芸術だとも言える。

通常、芸術作品は、経験的な素材に主観の想像力が加えられることによって成立すると考えられている。しかし、芸術制作に働く想像力は無制限ではない。単なる想像力だけなら、夢想にすぎない。また、芸術家は、自分の頭だけで考えたいイメージや計画を、そのまま腕づくで素材に強制するわけでもない。制作の現場では、芸術家は常に素材から制限されている。しかも、素材に制限されてこそ、造形芸術は成り立つ。素材は、芸術の形成作用に対して抵抗もするが、形作りを助けてくれる。素材は素材ですでに形作られており、石にしても、土にしても、木片にしても、布にしても、ゴツゴツしていたり、粒だっていたり、ざらついていたたり、節が多かったり、それ自身の性質をもっている。だから、画家にしても、彫刻家にしても、素晴らしい作品を作るには、材料の個性に精通していなければならぬ。

問

傍線部A「陶芸は、自然の中にみずからの行為を参入させて、自然の方から作品を作り出す芸術だ」とあるが、陶芸のどのような特徴を述べているか。六〇字以内で説明せよ。